

不登校に陥る前の状態像の検討

—テキストマイニングを用いて—

福岡大学臨床心理センター 相談員 芦谷 将徳

要約

本研究は不登校の事例を扱っている文献に不登校に陥る前の状態像が記述されていると仮定し、それらを量的な視点で明らかにすることを目的とした。論文検索サイトciniiで「学校ぎらい」「登校拒否」「不登校」「事例」のキーワードにより検索された1985年～2011年の間に出版された110件(195例)の事例論文及び文献を対象にテキストマイニングを行った。その結果、形態素解析では「勉強」、「祖母」が男子の方が、「妹」、「傾向」は女子の方が有意に多かった。「幼稚園」、「きっかけ」は小学生の方が、「部活」は中学生の方が有意に多くみられた。係り受け解析では「友達+トラブル」が女子の方が有意に多いことが示された。性別、学校の種類について、原文のデータを参照し、不登校に陥る前の状態像について具体的な対応策を挙げながら考察した。

問題と目的

文部科学白書(2011)によると、「不登校」を理由に年度間に連続または断続して30日以上学校を欠席した小・中学校の児童生徒数は、約12万2千人と依然として教育上の大きな課題となっている。この不登校に関する問題は、不登校に陥った児童や生徒の将来の可能性を狭めるだけでなく、社会的な引きこもりやニートといった問題のきっかけになりうることから、日本の社会保障制度等の根幹を揺るがす問題ともなっている。(小野, 2014) また、核家族化が進行する中で、家庭や地域でのつながりが希薄になってきており、各学校での教員の不登校に対する役割は大きなものとなっている。そのような中で、不登校に陥ってから対応するのではなく、予防に重きを置いたアプローチが今後、より重要になると考えられる。その際には不登校に陥る前の状態像を教員などの周囲の人々が把握しておく必要がある。

不登校に陥る前の状態像に関する研究としては、登校拒否傾向、不登校傾向に関する研究が挙げられる。原岡(1972)では小学校6年生を対象に潜在的登校拒否傾向の程度測定を行っている。その結果、「教師との関係が悪く、学習興味や動機づけが弱く、友人関係が悪い子ども」が登校拒否傾向を強く示すものと示唆されている。この研究では男女を分けずに分析が行われており、小学校6年生の大まかな傾向を捉えるに留まっている。古市(1991)では小学生男子は学業上の不適応から学校ぎらい感情を持つようになる傾向が強いこと、小学生女子と中学生で

は、主として友人関係上の不適応から学校ぎらい感情を持つようになる傾向が強いことが明らかにされている。五十嵐・萩原(2002)は、登校している中学生を対象とし、その不登校傾向の構造を状態像という視点から測定する尺度を開発することを目的として、質問紙調査を行っている。新たに作成された不登校傾向尺度は「別室登校を希望する不登校傾向」、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」、「遊び・非行に関連する不登校傾向」、「在宅を希望する不登校傾向」の4因子が抽出されている。五十嵐(2010)では小学生を対象として不登校傾向尺度(五十嵐・萩原, 2002)の検討を行っている。「休養を望む不登校傾向」、「遊びを望む不登校傾向」の2因子が抽出され、五十嵐・萩原(2002)との比較を行い、「休養を望む不登校傾向」が「別室登校を希望する不登校傾向」と「精神・身体症状を伴う不登校傾向」に、「遊びを望む不登校傾向」が「遊び・別室登校を希望する不登校傾向」と「在宅を希望する不登校傾向」にそれぞれ分化して複雑化していくことが示唆されている。

以上のように登校拒否傾向、不登校傾向に関する先行研究を概観すると、性別による違いでは、男子は、学業でのつまずきが不登校傾向を強め、女子では、休養・別室登校を希望することが不登校傾向を強め、その時期に精神・身体症状を伴うと考えられる。学校の種類による違いでは、小学生は劣等感を抱きやすく、教師、学業、友人関係につまずきがみられる児童に不登校傾向が強まると考えられる。中学生は学業、友人関係のつまずきに加え、規範意識

の低さが不登校傾向を強めていると考えられる。このように不登校の予防に関する研究は数多く行われているが、いずれも学校に登校できている児童生徒を研究対象としており、実際に不登校になっているわけではない点が課題として挙げられる。また、実際の欠席・遅刻・早退回数との相関も認められておらず(五十嵐・萩原, 2002)、その後不登校になったかどうかについて縦断的に研究したものは五十嵐・萩原(2009)、五十嵐(2011)のみであった。不登校に関する研究として縦断的研究の少なさが指摘されているが(保坂, 2002)、不登校に陥る前の状態像に関する研究でも同様のことが言えると考えられる。

一方で、すでに不登校に陥っている児童生徒の研究も数多く行われている。これらを概観すると、質的な事例研究が以前から数多く行われており(名島, 1985; 鳴川・笠井, 2002; 奥平, 2006など)、その多くが不登校に陥った後にどのようなアプローチをするかという視点に立った研究が多くみられた。これらの先行研究には、実際の不登校になる以前にどのような状態像であったかを量的に調査した研究がほとんど見当たらないという課題が挙げられる。筆者が検索した範囲では仙石(1990)と加藤・赤堀(2006)のみであった。仙石(1990)では登校拒否児をもつ親の会の参加者に対して調査を行っているが、登校拒否児本人への調査はなされていない。加藤・赤堀(2006)では不登校児童生徒に対して行われた電子メールカウンセリングを分析対象にしているが、自己開示について分析を行っている研究であり、不登校になる前の状態像を明らかにしたものではない。不登校状態にある児童生徒本人を対象とした量的な調査研究がそれほど多く行われていない理由として、倫理的問題や多くの調査協力者を集める方法論的な問題などが挙げられる。(堀ら, 2007)

量的な調査方法のひとつとしてテキストマイニングという手法がある。テキストマイニングとは、文字という質的データを統計的・量的に解析を行う手法である。林(2002)によると「テキスト(テキストデータ)を分析し、分析者にとって有益な知識や情報を取り出そうという技術」である。これまで、自由記述文のような大量のテキストは、人間が主観的に理解してまとめるしか分析方法がなかったが、コンピュータの進歩による自然言語処理の技術の進歩に伴い、大量なテキストを客観的に分析することができるようになった。

そこで、本研究では不登校に陥る前の状態像を量的な視点で明らかにすることを目的とする。不登校

の事例を扱っている文献から、不登校に陥る以前の記述に対しテキストマイニングによる分析を行い、性別、学校の種類の2点について不登校に陥る前の状態像を抽出し、先行研究で得られた状態像と比較及び検討を行う。

方法

分析対象

論文検索サイトciniiにより「学校ぎらい 事例」「登校拒否 事例」「不登校 事例」の3つのキーワードにより検索された1985年から2011年の間に出版された110件(195例)の不登校の事例を扱っている文献に記載されている不登校に陥る前の記述を対象に行う。本研究では生育歴なども含めた不登校に陥る前の記述を扱うため、保育園児、高校生の不登校事例の文献も含めて分析を行った。

分析手順

テキストマイニングソフトウェアであるTiny Text Miner(松村ら, 2009)(以下、TTM)、形態素解析エンジンMeCab、係り受け解析を行うためのシステムCaBoChaを用いて分析した。

1. データ入力

Microsoft Office Excel 2007にて分析対象を入力し、テキストマイニング用にCSV(カンマ区切り)データを作成した。併せて性別、不登校になった学年の2つのタグを付けた。

2. TTMによる分析

形態素解析、係り受け解析を行った。形態素解析とは、テキストデータを形態素(言語で意味を持つ最小単位)に分割し、それぞれの品詞を判別する作業を行い、それぞれの出現頻度や件数とテキストデータに紐付けられたタグにもとづく集計結果を出力するもの(松村・三浦)である。係り受け解析とは、語と語の修辞関係や主述関係を明らかにするものである。

3. 語の検索

日本語では漢字やひらがな、カタカナなどの同義異表記が見られる。それらに対し文脈が変わらない程度に修正を加えるために、検索機能を用い、同義異表記語の検索を行った。

4. データの修正、キーワード表、同義語表の作成

分析対象の表記の修正を行った。「親」、「父母」、「両親」をそれぞれ「父、母」、「祖父母」を「祖父、祖母」にそれぞれ表記を置換した。分析する際に一つの単語として認識するように、キーワード表を作成し(例: 中学3年生)、同じ単語としてカウントするように同義語表(例: 父、父親)を作成した。

表1 性別による出現頻度の割合の差、上位10単語

語	男	女	男割合(%)	女割合(%)	男-女(%)	χ^2 値
男	18	0	19.8	0.0	19.8	20.597 ***
勉強	14	1	15.4	1.1	14.3	12.727 ***
父	55	44	60.4	46.8	13.6	3.454
母	66	56	72.5	59.6	13.0	3.454
祖母	25	14	27.5	14.9	12.6	4.398 *
登校	44	35	48.4	37.2	11.1	2.336
小学校	29	20	31.9	21.3	10.6	2.664
クラス	21	31	23.1	33.0	9.9	2.243
妹	4	13	4.4	13.8	9.4	4.932 *
傾向	3	11	3.3	11.7	8.4	4.670 *

注：***p < .005, **p < .01, *p < .05

表2 小学生、中学生による出現頻度の割合の差、上位10単語

語	小学生	中学生	小学割合(%)	中学割合(%)	小-中(%)	χ^2 値
中2	2	20	2.1	23.8	21.7	19.482 ***
中1	7	23	7.4	27.4	20.0	12.798 ***
生徒	6	16	6.3	19.0	12.7	6.704 **
幼稚園	13	1	13.7	1.2	12.5	9.652 ***
学校	30	36	31.6	42.9	11.3	2.436
母	64	48	67.4	57.1	10.2	1.990
部活	5	13	5.3	15.5	10.2	5.141 *
手	13	3	13.7	3.6	10.1	5.601 *
きっかけ	13	3	13.7	3.6	10.1	5.601 *
いじめ	9	16	9.5	19.0	9.6	3.401

注：***p < .005, **p < .01, *p < .05

TTMにより得られた結果のうち、抽出された語が1回以上出現するテキストの件数とタグのクロス集計をもとに以下3点に関する分析を行った。

- (1) 性別(男-女)、学校種(小学-中学)の形態素解析の出現頻度の割合差、及び χ^2 値の算出
- (2) テキスト全体から単語間の係り受け関係を抽出する係り受け解析
- (3) 性別(男-女)、学校種(小学-中学)の係り受け解析の出現頻度の割合差、及び χ^2 値の算出

結果

1. 形態素解析

不登校になった児童生徒の性別により出現頻度の割合差が最も高い上位10単語を表1に示す。また、 χ^2 検定を行ったところ、有意水準0.5%で「男」、「勉強」という単語に有意差が見られた。有意水準5%で「祖母」、「妹」、「傾向」に有意な差が見られた。

不登校になった児童生徒の学校(小学校、中学校)

により出現頻度の割合差が最も高い上位10単語を表2に示す。また、 χ^2 検定を行ったところ、有意水準0.5%で「中2」、「中1」、「幼稚園」、有意水準1%で「生徒」、有意水準5%で「部活」、「手」、「きっかけ」に有意な差が見られた。

2. 係り受け解析

不登校になった児童生徒の性別により出現頻度の割合差が最も高い上位10単語を表3に示す。 χ^2 検定を行ったところ、有意水準5%で「祖父+父」、「友達+トラブル」、「ない+いう」、「母+弟」に有意な差が見られた。

不登校になった児童生徒の学校(小学校、中学校)により出現頻度の割合差が最も高い上位30単語を表4に示す。 χ^2 検定を行ったところ、有意水準5%で「話+する」に有意な差が見られた。

考察

出現頻度の割合に有意な差が認められたものを中

表3 性別による出現頻度の割合の差、上位10語

係り受け	男	女	男割合(%)	女割合(%)	男一女(%)	χ^2 値
祖母+父	11	2	12.1	2.1	10.0	6.393 *
父+母	37	29	40.7	30.9	9.8	1.131
祖父+祖母	13	8	14.3	8.5	5.8	1.167
友達+トラブル	0	5	0.0	5.3	5.3	5.308 *
身体症状+身体症状	11	7	12.1	7.4	4.6	0.846
身体症状+訴える	11	7	12.1	7.4	4.6	0.846
なる+登校する	5	1	5.5	1.1	4.4	2.624
母+言う	5	1	5.5	1.1	4.4	2.624
ない+いう	4	0	4.4	0.0	4.4	3.958 *
母+弟	4	0	4.4	0.0	4.4	3.958 *

注: ***p < .005, **p < .01, *p < .05

表4 小学生、中学生による出現頻度の割合の差、上位10語

係り受け	小学生	中学生	小学割合(%)	中学割合(%)	小一中(%)	χ^2 値
父+母	34	24	35.8	28.6	7.2	1.060
祖父+祖母	12	6	12.6	7.1	5.5	1.485
学期+始まる	6	1	6.3	1.2	5.1	3.117
登校+渋り	6	1	6.3	1.2	5.1	3.117
母+一緒	6	1	6.3	1.2	5.1	3.117
なる+登校する	1	5	1.1	6.0	4.9	3.304
話+する	0	4	0.0	4.8	4.8	4.627 *
小学校+入学する	4	0	4.2	0.0	4.2	3.618
身体症状+訴えるなる	4	0	4.2	0.0	4.2	3.618
なる+訴える	4	0	4.2	0.0	4.2	3.618

注: ***p < .005, **p < .01, *p < .05

心に、考察を行う。考察に先立ち、テキストマイニングに見られる、日本語特有の表記のゆれがあるため、原文データを参照し、考察するものを選定する。形態素解析、係り受け解析で有意な差のあったものの内、「男」、「祖母」、「妹」、「傾向」、「中2」、「中1」、「生徒」、「部活」、「祖父+父」、「ない+いう」、「母+弟」、「話+する」については原文の文脈中の意味の違いが大きく、一貫した使われ方がなされていなかったため、今回は考察から除く。

性別による形態素解析の結果から、「勉強」という単語が男子の方が女子よりも有意に多くみられた。「勉強」という単語のテキストデータを参照すると、「勉強は苦手」(中嶋, 2003)、「勉強嫌い」(鈴木, 1999)、「勉強が出来なくて」(安福ら, 2009)といった表記が見られた。男子児童生徒の不登校に関しては勉強に関する不適応が不登校に大きな影響があると考えられる。先行研究でも、原岡(1972)で「教師との関係が悪く、学習興味や動機づけが弱く、友人関係が悪い子ども」が登校拒否傾向を強く

示すものと示唆されていることから、実際に不登校に陥った児童生徒でも学習に関する不適応が不登校を誘発する1つのきっかけになると考えられる。加えて本研究の結果からは、学習に関しての不応は男子に大きな影響を与えることが示唆された。普段の学校の成績が直接不登校に結び付くわけではないと思われるが、点数や評定という他の生徒と明確な比較が可能な「学習」は学校への登校意欲を下げると考えられる。日本文化において、良い成績を残し、良い大学に行くことや給与の高い職業に就くことが1つの価値であり、加えて男性の方が稼がねばならないという規範意識が存在することも男子に大きな影響を与えていると考えられる。

学校の種類による形態素解析の結果から、「幼稚園」、「きっかけ」については小学生の方が有意に多くみられた。「幼稚園」に関しては、「A子は幼稚園に約二ヶ月しか通園することができなかった。」(桑原, 1998)、「四歳で幼稚園に入園したがなかなかなじみず」(福田, 1998)、「C子自身も、幼稚園の

ときにはときどき休んでは」(手塚、1996)との記述がみられ、幼稚園の際の通園状況や園での人間関係の形成の困難さが小学校に就学した後にも反映されると考えられる。「きっかけ」については、「風邪をひいたことなどがきっかけで、ときどき登校を渋るようになり」(河井、1996)、「なぜ欠席をきっかけに休みだした。」(田中、2004)、「友人に靴を隠されたことをきっかけに、不登校になった。」(和田、2003)、「遠足、歯痛をきっかけに完全不登校」(安部、2000)などの記述がみられた。このことから不登校に陥るきっかけに共通の記述は見られなかったが、小学校の方が、きっかけと考えられることがはっきりとしており、中学校になるとよりきっかけが複雑化し、特定することが難しくなることが示唆された。先行研究からは、小学生は劣等感を抱きやすく、教師、学業、友人関係につまずきがみられる児童に不登校傾向が強まると示唆されているが、本研究からはそのような結果は得られなかった。実際に不登校に陥る児童と不登校傾向を抱くに留まる児童では見せる状態像が異なっていると考えられる。「部活」という単語は、中学生の方が有意に多くみられた。「学習と部活(野球)が両立しないと休み始めた。」(安藤ら、2000)、「部活での人間関係がきっかけで不安感が強くなり」(高橋、2012)、「部活動で友だちが自分の悪口を言う」(荻野、1998)という記述がみられた。本研究では小学校の「クラブ活動」と中学校の「部活」とを比較している。先輩や後輩という縦の関係性が小学校よりも重んじられ、人間関係が複雑化していく。そのことに適応できないことが、学校全体への不適応を生み出す1つのきっかけになっていると考えられる。先行研究からは、中学生は学業、友人関係につまずきに加え、祖父母との同居、規範意識の低さが不登校傾向を強めていることが示唆されているが、本研究からは、学業、規範意識の低さに関する表記には有意な結果が得られなかった。

性別による係り受け解析の結果から、「友達+トラブル」については、「過食は高二の秋に友達とのトラブルがきっかけで始まる。」(塩路、2002)、「クラス替え後に友人とトラブルで不登校。」(岸田、2010)、「友人との間でも自己主張が強く、トラブルを起こすことがある。」(安藤、2000)、「中学2年になり級替えがあり、仲の良い友人とトラブルがあった。」(鈴木、2000)という記述が女子に多くみられた。先行研究から、女子では、休養・別室登校を希望することが不登校傾向を強め、その時期に精神・身体症状を伴うことが示唆されているが、本

研究からはそのような結果は得られなかった。このことから、不登校に陥る女子児童生徒は友人関係でのトラブルが根底にあり、休養や別室登校、精神症状や身体症状を呈し始めると考えられる。

以上のことから、不登校になる前の状態像として以下の4点が示唆された。①男子は、学業でのつまずきがみられる。②女子は、友人関係でのトラブルが不登校のきっかけになりうる。③小学生では、幼稚園の段階で不適応状態が見受けられる。④中学生では、部活動でのトラブルが不登校の背景に存在しうる。

これらの状態像に対する対応策について以下で述べる。

①については、学習面や成績等に配慮した学習内容や課題の提示、通級指導教室や特別支援学級などの活用が考えられる。②については、友人関係でのトラブル起きないように配慮することはもちろんであるが、トラブルをゼロにすることは現実的ではない。友人との間でトラブルが起きた際にどの様に対処するのか、事前にスキルを身につけておくことや活用できそうな社会資源を確認しておくといった方法が考えられる。③については、幼稚園や保育園での登園状況を教員などの周囲の人が知っておくこと、また体調不良などを起こした児童に対して配慮することが考えられる。④については、先輩や同輩に対してのソーシャルスキルを身につけておくことが不登校の予防につながると考えられる。

今後の課題として、テキストマイニングという分析方法の限界が挙げられる。日本語にはひらがなのみならず、漢字、カタカナという多様な表記方法が存在し、また表現方法も多様なため、それらの細かいニュアンスを汲み取ることが難しい。今回はそのニュアンスのゆれをできる限り汲み取るために原文データを踏まえながら検討を行ったが、より多くのデータ量になるとそのような分析が難しくなることが予想される。今後はこれらのテキストマイニングの限界を解決できるように、シソーラスの作成が重要であると考えられる。また、今回の分析は1要因による検討(例えば、性別には小学生や中学生、高校生なども含めている)であるため、今後はさらに細かな分類による検討が必要である。

引用文献

安部啓子(2000). オープン・クリニック・スタイルによる不登校児童の発達支援の試み——スクールカウンセリングの一事例から 九州大学心理学研究, 1, 21-28.

- 安藤總子・佐々木葉子・岸田禮子(2000). 相談所における統計からみた不登校児の傾向そのII:事例をとおして 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 617.
- 有賀直美(1998). 親との面接を考えるスクールカウンセラーの役割 児童心理, 52(9), 88-91
- 福田憲明(1998). 長期化した不登校 児童心理, 52(9), 152-155.
- 古市裕一(1991). 小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24(2), 123-127.
- 原岡一馬(1970). 登校拒否傾向の要因分析(1) 日本教育心理学会総会発表論文集, 12, 294-295.
- 林 俊克(2002). Excelで学ぶテキストマイニング入門 オーム社.
- 堀 洋道(監), 櫻井茂夫(編), 松井 豊(編)(2007). 心理測定尺度集〈4〉子どもの発達を支える“対人関係・適応”サイエンス社.
- 保坂 亨(2002). 不登校をめぐる歴史・現状・課題(展望) 教育心理学年報, 41, 157-169.
- 五十嵐哲也・萩原久子(2002). 中学生における不登校傾向に関する研究(1)——不登校傾向尺度の開発 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 275.
- 五十嵐哲也・萩原久子(2009). 中学生の一学年間における不登校傾向の変化と学級適応感との関連 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 12, 335-342.
- 五十嵐哲也(2010). 小学生用不登校傾向尺度の作成と信頼性・妥当性に関する検討 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 13, 211-216.
- 五十嵐哲也(2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 教育心理学研究, 59(1), 64-76.
- 加藤尚吾・赤堀侃司(2006). 電子メディアを用いたカウンセリングにおける不登校児童生徒の自己開示に関する分析 日本教育工学会論文誌, 29(4), 607-615.
- 河井英子(1996). 教師は親子の問題にどう関われるか——不登校の子どもの事例から 児童心理, 50(10), 976-981.
- 岸田幸弘(2010). 教師が行う不登校児童生徒への支援——小中学校教師へのインタビューから 學苑, 836, 50-62.
- 桑原和子(1998). 母親から離れられない少女 児童心理, 52(9), 156-159.
- 丸山義王(1996). クラスでおならをしてから不登校 教職研修総合特集, 128, 181-184.
- 身崎裕司(1998). 無気力な状態に陥っている子 児童心理, 52(9), 58-61.
- 文部科学省(2011). 文部科学白書 佐伯印刷株式会社.
- 名島潤慈(1985). 登校拒否生徒に対する訪問カウンセリングの意義——事例の検討 教育工学センター紀要, 2, 73-78.
- 中嶋邦彦(2003). 子どもの心因性諸症状と家族関係:家庭, 学校, 専門機関との連携の意義鳥取短期大学研究紀要, 48, 109-117.
- 鳴川啓子・笠井茂美(2002). 校内プロジェクト体制による不登校児へのアプローチ実践事例 情緒障害教育研究紀要, 21, 153-158.
- 荻野規子(1998). サービス過剰で疲れ切った子 児童心理, 52(9), 62-65.
- 奥平俊子(2006). 不登校治療におけるタッチングの効果について——事例からの考察 人間文化研究, 6, 79-90.
- 小野昌彦(2014). 学校教育法施行令を遵守した不登校認定導入による市単位の中学生不登校・コンプライアンス研究, 2, 73-80.
- 校発現予防の効果:新規不登校発現率半減を達成した東大和市の例.
- 仙石義博(1990). 「登校拒否児をもつ親の会」の研究 情緒障害教育研究紀要, 9, 99-104.
- 塩路良枝(2002). 過食症により不登校になった高校生の事例 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 639.
- 鈴木金弥(1999). 〈資料〉愛知県における不登校の22事例 愛知学院大学文学部紀要, 29, 157-167.
- 鈴木金弥(2000). 〈資料〉平成11年度愛知県家庭教育カウンセリング事例解析——不登校の8事例 愛知学院大学文学部紀要, 30, 191-201.
- 高橋芙美子(2012). 不登校事例へのスクールカウンセラーのコンサルテーション 東北女子大学・東北女子短期大学紀要, 50, 86-90.
- 手塚光善(1996). 母親が就職後, 不登校 教職研修総合特集, 128, 178-180.
- 田中和代(2004). 不登校生徒を再登校に導いた事例の一考察 日本教育心理学会総会発表論文集, 46, 315.
- 和田裕美(2003). 不登校女兒がシェルターとして病院を利用した事例 日本教育心理学会総会発表論文集, 45, 743.
- 安福純子・中角正子・田中みのり・浅野寿子

(2009). 不登校と保健室養護教諭の関わり 大阪教育大学紀要. 第4部門, 教育科学, 58(1), 261-278.

謝辞

本研究をまとめるにあたって御指導いただきました、福岡大学人文学部教授・田村隆一先生に心より感謝申し上げます。